

***東京天文台談話会第801回～第900回の記録ノート**

アーカイブ室新聞第712号(2014年1月20日)に「木下宙名誉教授から談話会記録などを収蔵」という記事を書いた。この木下 宙氏からお預かりした東京天文台記録は、第712号に書いたように、1) 東京大学東京天文台談話会記録(ガリ版刷り) No. 451～No. 700(1945年12月～1965年12月)、2) 東京大学東京天文台談話会記録(大学ノート) No. 801～No. 900(1971年(昭和46年)4月～1974年(昭和49年)5月)、3) 東京大学東京天文台談話会記録(大学ノート) No. 901～No. 979(1974年(昭和49年)6月～1976年(昭和51年)12月)、4) 東京大学東京天文台談話会記録(大学ノート) No. 980～No. 1000(1977年(昭和52年)1月～1977年(昭和52年)7月)、5) 東京大学東京天文台談話会記録(布張りバインダー) No. 1001～No. 1070(1977年(昭和52年)9月～1979年(昭和54年)6月)、6) 東京大学東京天文台談話会記録(空色フラットファイル) No. 1073～No. 1234(1979年(昭和54年)7月～1983年(昭和58年)12月)の6点であった。そしてアーカイブ新聞第715号(2014年1月24日)に「東京大学東京天文台談話会 No. 451～No. 700 記録を収蔵」という記事を書いた。この談話会記録は講演年月日、講演者、演題のみ記載されたものであった。

ガリ版刷りの東京天文台談話会記録は1945年(昭和20年)12月12日のNo. 451～1965年(昭和40年)12月17日のNo. 700 までか掲載されており、No. 450 以前の記録がない。それはおそらく1945年(昭和20年)2月8日未明の東京天文台本館の火災で談話会の記録が焼失したためと思われる、また戦後談話会が復活するには世の中が落ち着く12月まで待たねばならなかったのであろうと思われる。

木下氏から譲られた談話会記録のガリ版刷り以外の記録は、講演年月日、講演者、演題の他に約1ページの講演要旨が書かれているが、第701回から第800回まで、このような講演年月日、講演者、演題のみ記載されたものもなかった。

東京天文台が毎年発行している年次報告には1965年(昭和40年)の第8冊から東京天文台談話会記録が掲載されており、昭和40年の年次報告にはNo. 686～No. 700、昭和41年の年次報告にはNo. 701～No. 712、昭和42年の年次報告にはNo. 713～No. 728、昭和43年の年次報告にはNo. 729～No. 741、昭和44年の年次報告には、No. 742～No. 761、昭和45年の年次報告にはNo. 762～No. 793、昭和46年の年次報告にはNo. 794～No. 822 が講演年月日、講演者、演題のみ記載されている。昭和46年の年次報告は第14冊である。

談話会の記録が、講演者に講演要旨を書いてもらうようになったのが1971年4月2日のNo. 801 からのようであり、その年の談話会係は内田 豊、宮本昌典、成相恭二の3人である。

東京天文台で毎週金曜日 15 時 30 分から行われていた談話会は、話題性のある研究報告、海外に出かけた報告など、論文にする前の preliminary report を焼く 1 時間にわたって話す。これは研究論文になる前の報告だから、その時その時の最新の情報になっている。天文学会の短い講演と違って聴き応えがあったことを覚えている。今回記事にした昭和 46 年 4 月の No. 801~昭和 49 年 5 月の No. 900 の中の例を 2~3 紹介しておく。まずは宇宙研の第 805 回の小田先生の「CygX-1 は X 線パルサーか」という談話会の記録（写真 1）である。X 線天文学誕生まもない頃の講演で、最先端の X 天文学を切り開いたご本人の談話の要旨であり非常に興味深い。

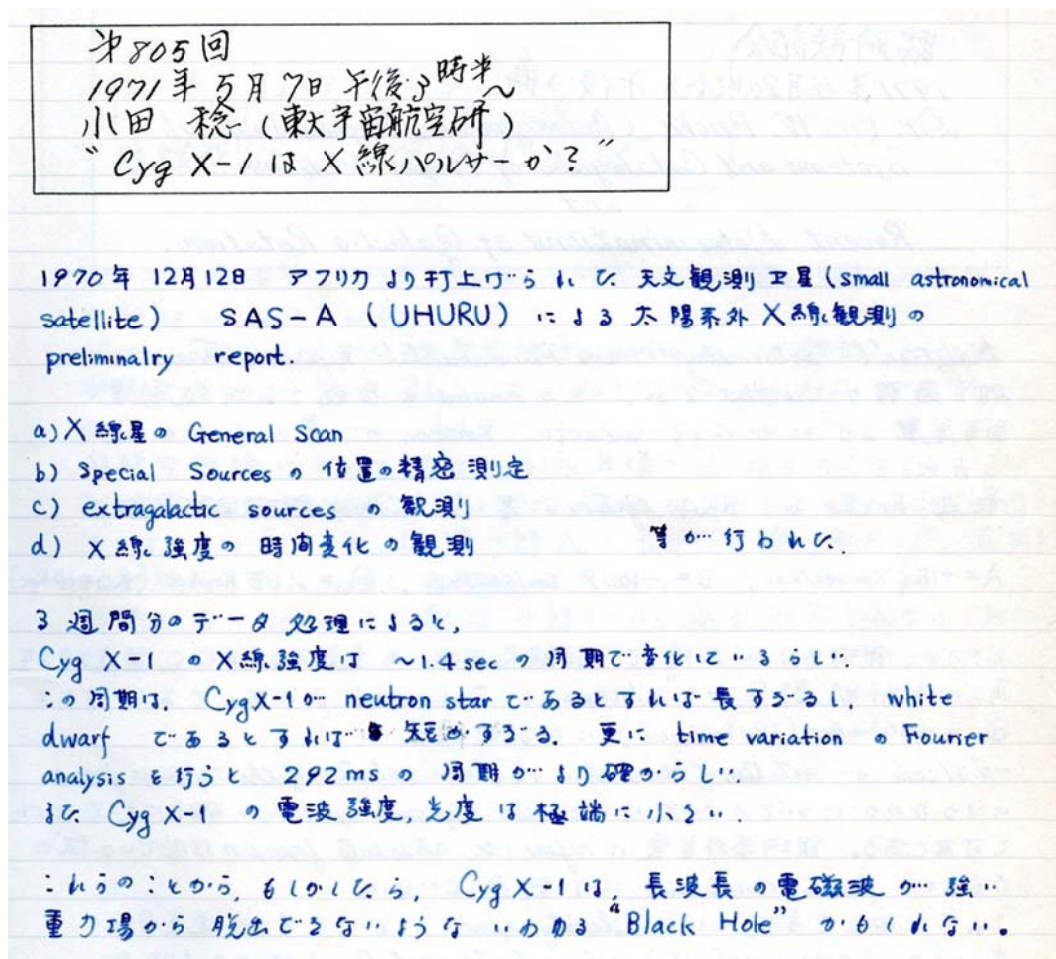


写真 1

次は、No. 808 の古材由秀氏の「月レーザー測距実験」（写真 2）は、地球一月間の距離を正確に測定しようとした月レーザー実験の話で興味深い記録である。この実験は岡山天体物観測所の 188 cm 望遠鏡を使って、アポロ 11 号が月に設置したレーザー光線の反射板に向けてレーザーを発射し、その反射光が帰ってくる時間を測定する実験であった。これらの実験を進め、堂平観測所に月レーザー 3.6m 望遠鏡建設へと進んでいくのである。結果的には、研究は全てが実を結ぶものではない例の一つに数えられるかもしれないものであったが、先駆的な実験の報告である。

808
 1971年6月11日、午後5時半～
 石田秀；月レーザー測距実験

1971年 1月21-22日, 2月15-18日, 4月16-19日に岡山天体物理観測所の188cm望遠鏡を使ってレーザーによるApollo 11号反射板の距離測定の実験を行った。このうち2月15日と18日は快晴のためきれいな発射した。レーザーはQ-switch Nd:YAGレーザーで、20nsの短いパルス状態で出力は6 jouleであった。望遠鏡はoffset guidingをした。

2月15日には(O-C)=3μs=450m, 2月18日には(O-C)=1μs のとつに反射光と異なる信号ともみえた。この値は少し大きい。その原因としてはcounterなどの時間間隔のずれや装置の誤動作が考えられる。

写真2

写真3は、乗鞍コロナ観測所に建設された25cmクーデ型コロナグラフについて話された守山史生氏の記録である。

812
 1971年7月8日(木)、午後5時半～
 守山史生；
 25cmクーデ型コロナグラフについて

乗鞍20cm観測所に新設されたクーデ型20cmグラフの分光器及び制御系の検定について報告した。

分光器は

- 1. 長格子分光器 (f=7000mm 分散約1Å/mm)
- 2. 短格子分光器 (f=2600mm 分散約8Å/mm)
- 3. 逆格子分光器 (f=3500mm 分散約0.5Å/mm)

の三種の恒温箱(2m×2.5m×2m)の中に設置し、空間分解能1" スペース分解能3×10⁴Å/mに設計された。

このほか、スリット上の単色像を監視し、そのプロセッサにプログラムで自動的な観測を行う制御装置もついている。

プログラムは

1. occulting diskの位置設定(範囲は光軸方向に約30cm)
2. gratingの回転角の設定(範囲は10°及び2次の可視域をカバー)
3. 露出時間の設定(0.1秒から約30分まで2倍の系列)

により、露光の環境の可変性(12倍)、連続撮写の切替も可能。intensity markは露光後露出時間の対応したマークの入ったスペースの自動的な検出される。

写真3

ここまで書いてきて、これは筆者の勝手な抜粋ではダメだと思うようになった。これらの記録は、中には談話会係が書いたものもあるが、講演者本人が直筆で書かれている貴重なものである。これは形を改めたアーカイブにし、誰でも読める形でなければと思う。

これらアーカイブ新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp